

特 253

568

將子爵小笠原長生 址

奥村女史を偲びて

總裁殿下の御高德に感激す

愛國婦人會

始





特 253  
588

本稿は昭和九年二月六日ラヂオ放送「愛國婦人の夕」に當り愛宕山東京中央放送局に於て講演せられたるもの、寫なり。

奥村女史を偲びて

總裁殿下の御高德に感激す

陸軍中將 子爵 小笠原 長生

婦人團體として、世界一と言はれる我が愛國婦人會の生の母、奥村五百子女史は、二十八年前の二月七日、六十三歳を一期とし、合掌して、婦人會の後事を親い友に託しつ、「何時死んでも如來様がお取り下さる、」との日頃の大信念を、如實に顯した大往生を遂げたので、今夕は恰も其の逮夜に相當するのであります。逝去當時の女史の相好には、輝くばかりの歡喜の色が漲つて、言ふ許りなく尊い感じを示して居りました。それも其の筈で、女史が六十三年の經歷は、國家的活動を以て一貫して居るが上に、其の數多い事業の中で、たゞの一度も自分の利益を計つたと云ふ事が無い。就中、其の全精神を投げ込んだ愛國婦人會設立の



二  
動機の如きは、正に我が軍隊への、一大禮讚と云はねばなりません。明治三十三年の北清事變の際、偶々天津方面に居合せた奥村女史は、我が軍人が一杯の飲料水さへ得られないやうな、困難な場合にありながらも、飽まで皇國軍人たるの品位を失はず、邦人のためには勿論、隣國の老人や婦人の爲にも、命をも惜まないうて、之を保護してやつた天晴健氣な舉動を見て、何うして感動せず居られませう。女史は我が軍人に對する謝恩の念に全心を煽られて、迎もジツとして居られなくなり、

「我々日本婦人が外國人の辱を受けず、安泰にして居られるのは、天子様の御稜威と、忠勇義烈の軍人があるからである。されば私共婦人は、戦争にこそ従事できぬが、安閑として、軍人達が、御國の爲に盡されるのを見て居ては、相濟む譯のものではない。御婦人の皆様よ、半襟一かけを節約して戦歿兵士の遺族を救へ。」

との、叫びを擧ぐるに至つたのであります。

私は従來、雄辯を以て聞えてをる人々の演説を、澤山聽いてをりますが、奥村女史の講演ほど泣かされたことは他に御座いません。女史が病軀を提げて演壇に立ち、涙滂沱として、我が將兵の健氣さを語り來るとき、其の面上には熱情燃え、其の聲には同情が溢れ、聽き入る御婦人方は申すに及ばず、髭武者の荒くれ男子でも、泣かされずにはゐられなかつたのであります。婦人會發會式の際の如き、聽者の一人であつた島田三郎氏などは、終に其の座に居堪まらず、ハンケチで顔を押へながら隣室に駆けこんで泣いた程でありました。私共は、今憶ひ出してさへ、眼頭が熱くなるのを禁じ得ませぬ。

月日は流れて、いつしか明治三十七年となり、日露戦争は勃發しました。其の際各戦地に在る將兵より、奥村女史宛の感謝の手紙は續々到着



したのであります。一例として其中より一文を取出し、之を次に掲げて見ませう。

拜啓小生は陣中にありて貴下に一書を呈するの光榮なるを喜ぶ者に候。小生は此度の大快戦に會し、貴下等の熱誠に依りて生れたる愛國婦人會が如何に多くの熱誠と如何に多くの女性的義勇奉公心とを誘發し、以て皇軍のために盡し、以て國家のために貢獻することの大なるかを記憶し、爰に滿腹の精神を捧げて感謝の意を表するものに候。而して余が今踏破しつゝある戦地の婦人が如何に疑懼の念と卑怯の舉動に驅られ、其の醜態を暴露して恥ぢざるは、老大國の教育が彼等をして斯の如き天性を習はしむるに至りたるを、深く慨せずんばあらず候。余は曩年北清事變に従軍し、貴下が陣中を慰問し、國兵に、尠からざる慰安と奨勵とを與へられたるを忘るゝ能はず、而して

四

今や、貴下の首唱にかゝる婦人會が全國に普及し、多大の効果を軍國の上に寄進せらるゝを聞くことに、益々景慕の情に不堪、茲に一書を呈して、貴下及び會員諸氏の健康と幸福とを祈るものに候。匆々

明治三十七年八月二十七日

在外

第三軍第一師團彈藥大隊本部附

陸軍歩兵軍曹 三 浦 覺 玄

奥村五百子様

と認めてあつた。第三軍と云へば、申すまでもなく、乃木將軍の率ゐてゐた旅順攻圍軍なので、同軍は明治三十七年八月十九日より二十四日に亘り、旅順の敵に對して始めて總攻撃を開き、攻撃の主點を要塞の東北面なる二龍山、東鷄冠山の兩保壘間と定めて、部下たる第一師團、第

五



九師團、第十一師團を擧げて強襲法に依り、一舉に敵の堅壘を踏破らうと企てた。が、敵も必死となりての防戦頗る強硬なるのみならず、難攻不落と看板打つた無双の要害に據つて互に聯絡を取り、正面竝に側面より、大小無数の彈丸を拳下りに雨霰と注ぎかけるので、あはれ我が突撃隊は屢々全滅の悲運に遭ひ、戦鬪次第に苦境に陥らうとしたが、乃木軍司令官は猶も屈せず、終に師團の全滅を賭して突撃を繰返すべきの命令を發するに至つた。是に於て劇戦は其の極に達し、彈藥が盡きると銃劍を以て切結び、劍が折れると石礫を投げ合ひ、終には組打して齒と齒で噛み合ふと云ふまでの慘狀を呈した後、辛うじて目的の一部は達したが、我が軍の損害は非常に多く、死屍累々として高臺の全斜面を掩ふに至つたので、有繫の乃木將軍司令官も、終に攻撃の繼續を斷念し、惡戦苦鬪六日の後、即ち八月二十四日に至り、命令を發して強襲的攻撃を中

止し、各師團をして、占領地點を固守せしむる事にしたのであります。前記の三浦軍曹の手紙は、此の激戦後三日を経て認めたものであります。斯様な惡戦苦鬪に遭遇した時、彼等將兵をして、益々義勇奉公の念に燃えたゝしめるものは何でありませうか。申すまでもなく、國民の彼等に對する篤い信賴ではありませんか。深い同情ではありませんか。私なども覚えがあります。戦地に出て、大敵と戦ひ、波風と戦ひ、寒暑と戦ひ、記録の一枚々々を血を以て色彩るやうな悲壯な境遇に立つた際同胞は飽まで自分等を信賴し、安んじて國家の運命を任せてをると解した時程、緊張させられることは無いので、實に身顛ひが出る程になり、大敵も波風も、ものゝ數とは思はない位に感奮するのであります。況してやそれが、戦争などには關心を有たるゝことが薄からうと考へてゐた御婦人方の激勵とあつては、一層の奮起を促され、實に、他人よ



八  
り先きに戦死するの名譽を、擔ひたいまでになるものであります。斯様な譯でありますから、愛國婦人會々員たる方々の、軍隊に對する責任亦重大なりと云ふべきであります。それにつけても私は、奥村女史の眞心が沈々偲ばれてなりません。

六十三年唯至誠。身を忘れ國を憂ひて斯の生を畢る。之れは生菩薩とまで言はれた眞宗近世の碩徳南條文雄博士が、奥村女史を追悼した詩の最初の二句であります。洵に女史の爲人を言顯して餘蘊ないので御座います。

又女史の臨終に侍してゐた廣岡淺子刀自——此の人は、女史と最も肝膽相照した親友で、當時兩女傑の稱があつた人であります——其の淺子刀自は、女子の臨終に就いて大略斯う話されてをる。

「女史は婦人に得難い長所を持つて居られました。それは國の爲、人の爲めには身命を捧げて一步も退かないのであります。又一つの仕事を受け合ふた以上は、死んでも止めないといふ美しい精神であります。その點を以て私は友として交つて居りました。五百子も亦私を友と信じて居つたのであります。……(中畧)……此の度病氣が餘程重いと聞きましたので、見舞に參りました。いろ／＼平日の通り談話をされましました。それで自分は愛國婦人會を作りは作つたが、學問がない爲めに志は半途しか遂げられない。會は今六十萬の會員を有して盛大になつて居る様に見えるが、決して成功はして居らない。どうかして會を眞に國家の爲めになる會としてくれ、と懇々私に頼まれたのであります。其の臨終の際は實に立派な死様であつた。私は今まで此の様な臨終は見たことがありません。五百子はともかくもあれだけの働をして、それで自分は少しも成功したと思はないのは、實に偉いと云はねばなり



ませぬ。

その志を眞に遂げさせるには、婦人が起たねばなりません。五百子  
が一人で聲をからした事を、大勢の婦人の力で成し遂げなければなり  
ませぬ。それでなければ國家は救はれないのであります。此の時に當  
つて私は、切に皆さんの御奮起あらん事を望むのでございます。」  
此の談話に據つて見るも、奥村女史が死ぬまで、國家を憂ひ、婦人會  
の前途を深く心配してゐたことが、痛感されるのであります。

併し奥村女史が熱烈であつたにしても、其の力だけでは、決して  
今日のやうな盛大な婦人會を作ることには出来ませぬ。其處には近衛篤  
磨公を始めとして、澤山の名士が相談に與り、或は後援者となつたりし  
て女史を助け、思ふ存分に女史をして活躍せしめたのであります。が、  
猶その上に、前總裁であらせられた 閑院宮妃殿下、現總裁であらせら

れる 東伏見宮妃殿下、御二所様の、筆にも盡されぬ程の御眷顧を辱ら  
した事が、女史をしていやが上にも感激奮起せしめ、身も心も捧げて、  
國家守護の大任に當る軍隊のため、後顧の患なからしめやうと、決心す  
るに至らしめた一大原因なので御座います。

奥村女史がやんごとなき方々様に始めて拜謁仰付られ、難有き御意を  
頂戴したのは、愛國婦人會を興す二年前即ち明治三十二年の事で、當時  
女史は朝鮮に於て一大事業に従事して居られたのであります。然うして  
東伏見宮妃殿下に拜謁の後、偶ま病を患ふて暫時郷里の肥前唐津に起臥  
することゝなりましたが、斯くと聞き召された妃殿下には、親王様に書  
道を御指南申上げてゐた杉山令吉氏を、わざ／＼私方にお遣しになり、  
「奥村の病状は如何であるか、なほはかばかしくないやうならば、小笠  
原より勧めて出京させては何うであるか、然うすれば當方にて、ベル



ツ博士の診断を受け得さすやう取計らうであらう。」

と仰越されました。奥村女史は何と云ふ幸福者でありませう。斯程まで厚き御仁慈に浴しては、女史ならずとも、誰れか感激に打たれずに居られませうか。況して人並はづれて感受性の強い女史でありますから、私より此の恩命を傳へ聞いた時、オイオイ聲を擧げて泣いたと云ふのは、然もあるべきこと、存じます。さうして次のやうな電報を私方へよこしました。

「身にあまる果報、五百子は石に嚙りついても死にませぬ、よろしくお禮言上を願ひます」

此の一條に徴するも、女史が如何に厚い御愛顧を被り居りしかを、推知するに足るでありませう。

奥村女史逝去の當時、六十萬人の會員であつた婦人會は、次第に發展

して今や二百萬人に達し、世界に於て最も大なる婦人會となつて居ります。これは歴代の會長以下役員諸姉の、獻身的努力に依ること多いのは勿論であります。恐れながら東伏見宮妃殿下が、前總裁殿下の御志を繼がせられ、總裁の御位置に立たせられて、金枝玉葉の、加之荒き風にも堪へさせ給はぬ御女性様の御身を以て、東奔西走、文字通り御席暖まるに暇ない程の、御活動をお続け遊ばさるゝ結果と、拜察する次第であります。

畏くも總裁殿下に於かせられては、昨年の如きは、長崎縣以下八縣、及び北海道にならせられたる外、海には海豹吼え、陸には馴鹿駈ける樺太までもお渡りになつたのであります。其の御出發に先立ち拜謁致しました際、私は亡き奥村女史に代つて篤く々々御禮申上げ、

「恐れながら浪荒き北海を越えさせ給ひ、遠く樺太までもお渡り遊ばさ



れて、御國のため婦人會のため御盡瘁遊ばされる御事は、啻に婦人のみ  
てなく、男子にとりても此の上もない刺激となつて、いか許り奮起致し  
ますこととて御座いませう。奥村女史の靈は、唯々難有涙に暮れ、合掌し  
て御禮申上げて居る事と存じます。」

と言上したる所、殿下には感慨無量の御面色にて、

「奥村女史が世に在りし時は、六十餘歳の上に痛く健康を損ねて居たに  
も拘らず、薬壘を携へ草鞋を穿いて、内地は云ふまでもなく、朝鮮滿  
洲までも行脚して、本會のため盡してくれたのでは無いか。壇上に吐  
いた其の血汐の一滴々々は、御國のため皇軍のために捧げた尊い珠玉  
でなくて何んであらう。それに較べると、自分の旅行の如きは、言ふ  
にも足りない程である。自分は將來も力の續く限り本會のために盡し、  
何とかして會員が一千萬以上に達するやうにしたいと思ふてゐる。さ

うなつたら奥村が、命がけて御國に盡した志に、始めて報ゆることに  
ならうと思ふ。」

此の御言葉を拜聴しました私は、難有さに胸逼つて、御前と承知しな  
がらも、涙を留めることが出来ず、さしうつむいたまま御前を退出致し  
たのであります。

仄に拜承しますと、總裁殿下には、本年秋には遙々朝鮮にお出まし遊  
ばすとの御事であります。前にも申述べました通り、朝鮮は奥村女史が  
海外雄飛の最初の場所、其處へ成らせられると申すのも、深い御因縁  
の致す所、女史の英靈は、必ずや御尊體を御守護申上げ、大々的效果を  
御齎しに相成ること、確信仕る次第であります。

今や婦人會は、非常時に直面して一大飛躍を試みつゝあると同時に、  
其の本旨に基き致々として、時代に順應する新事業、例へば種々の社會



事業、婦人報國運動等に着手してをられます。誠に結構なことで、私は之に對して滿腔の賛意を表するのであります。爰に謹みて、總裁殿下の御健康を賀し奉り、會の前途を祝福致します。(完)

昭和九年二月廿八日印刷  
昭和九年三月五日發行

發行人

東京市麴町區九段一ノ五  
社團 法人 愛國婦人會

小田部胤康

發行所

東京市麴町區九段一ノ五  
社團 法人 愛國婦人會

電話九段(33)一三一二番  
振替東京四七四一八番

不許  
複製

印刷所

東京市京橋區木挽町八ノ四  
合資 會社 新聞印刷所



終

